
緋弾のARIA A A 欲望の欠片

いちごムース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア A A 欲望の欠片

【Nコード】

N 2 9 0 3 Y

【作者名】

いちごムース

【あらすじ】

間宮あかりは事件解決のために武装を許された探偵「武偵」を目指し、東京武偵高に通う強襲科の1年生。様々な人と出会って彼女はどんな成長を遂げるのか？

間宮あかり（前書き）

「緋弾のアリア 欲望の交差」外伝、本日からスタートです。

間宮あかり

現代日本、凶悪化する犯罪に対してある資格が設立された。武装を許可され荒事を有償で解決する何でも屋。・・・武偵探偵、通称『武偵』

東京武偵高強襲科1年のあたしには目標がある。アリア先輩みたいになるんだ。

「アリア先輩・・・今日も素敵ですう！・・・あれ？」

あたしは壁に張っているアリア先輩の特大ポスターにほったをすりつけていると壁にかかっている時計が視界に入る。その時刻は7時59分を示している。・・・あれ？もしかして・・・。

「うぎゃ~~~~！！」

遅刻寸前じゃん！！

「のか！どうしておこしてくれなかった~~~~！」

「起こしました。・・・そしたらお姉ちゃん蹴ったもん！」

「ご、ごめん・・・」

「いいから準備！」

私はののかに支度をしてもらうと朝食であるにこにこマークのついたトーストを咥えながら玄関のドアを開ける。

「んじやののか！先にいくね。チカン！車！スリには気をつけるの

だぞ！」

私の名前は間宮あかり。東京武偵高に通う強襲科の1年生だ。そして今、私がいる場所は通称‘学園島’。武偵を教育する機関……武偵高の所在地だ。

「な、何とか間に合った」

武偵を育成するこの高校では射撃や犯罪捜査などの専門科目を履修できる。

たとえば拳銃や剣を使った接近戦の強襲逮捕を得意とする強襲科。

狙撃銃を使った遠隔からの狙撃支援を学ぶ狙撃科。

探偵術や推理術を主に学ぶ探偵科。

装備品の調達・カスタマイズなどを学ぶ装備科。

車輛・船・航空機などの運転操縦を学ぶ車輛科。

通信機器を用いた支援をする通信科。

魔術や超能力などの研究、育成をする超能力捜査研究科（通称SR）。

他にも諜報科や尋問科。鑑識科や衛生科などもあるが中でも異色なのが……仮面戦士科と呼ばれる学科だ。その学科は犯罪者を捕まえることが目的ではなく、怪人と呼ばれる人間ではない怪物達を相手にするという学科だ。

「日本にはまだ取り入れられていないけど・・・アメリカとかフランスには特捜科^{レンジャー}って学科もあるらしいんだよね」

日本でも取り入れようという話はあるのだが・・・あたしにはよく分からない。分かるとしても仮面戦士をサポートするための専門学科ってことくらいだ。あたしはそんなことを思い出しながら校門を潜ると・・・

「おい！あれ、見てみろよ！」

「え？・・・マジかよ。不味いんじゃない？」

人ごみの中からそんな声が聞こえてきた。あたしはひとごみを潜り抜けて様子を見てみると・・・

「大変！？車輛科の女の子がやられてる！」

車の中から車輛科の女子生徒達が手錠をかけられた男達に掴まれて出てきた。

「~~~~~！！」

「~~~~~！！」

その男達は何を言っているのかは分からないが・・・男達は今にも暴力を振るいそうな感じだ。

「~~~~~っ！！」

「BadLoosers^{やめなさい}！！」

1人の男が車輛科の女子生徒を殴ろうとした時・・・男の後ろか

らは『あの人』の声が聞こえた。

「・・・・・・・・」

東京武偵高強襲科2年のSランク武偵・・・神崎・H・アリア先輩だ。

「~~~~っ!!」

1人の男はアリア先輩を指差しながら近づいていくと・・・

「っ!!」

ドカツ!

「ウアアッ!」

アリア先輩は右手でその男の腕を掴み、左手で顎を叩いた。そして、腕を引っ張り上げると自分の体重の2〜3倍はありそうな男を背負い投げで地面にたたきつけた。

「~~~~っ!!」

その光景を見た男の仲間の1人は後ろからアリア先輩に殴りかかるも・・・

「・・・・・・・・っ!」

ドカツ!

「ヴォ!」

アリア先輩の振り返り際に顔面を殴られた。そしてもう1人の肌黒で大柄な男は、アリア先輩に拳を振り下ろすも……アリア先輩はそれよりも先に後ろに回りこみ、両足で首を挟むようにして捻ってやった。

「つもう。 You Should Know When To Give Up (往生際が悪いんだからっ)！」

「神崎さん！」

男達に小さな声でそう言ったアリア先輩の下に強襲科の武装をした生徒達がやって来た。

「こいつらただの窃盗犯だったのよ。尋問科にぶち込んで。鑑識科は現場を検証。まだ仲間がいるはずよ、注意しなさい」

「「はいっ！」「」」

指示をされた生徒達は、それぞれアリア先輩の指示された通りに行動を始める。

「やっぱりすごいなあ……アリア先輩！」

強襲科のエリートで、拳銃・格闘戦のエキスパート！英国貴族で14歳からロンドン武偵局の武偵として、欧州各地で活躍後、日本に留学。犯罪検挙率99%で、轟く二つ名は『双剣^{カトラ}双銃のアリア』・……ステキっ!!

•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	
•		
•		
•		

登校後、あたしは教室で戦姉妹契約申込書を書いていた。
アミカ
希望する相手はもちろん決まっている。

「
・
・
・
・
フ
フ
・
・
」

バツ！

「あっ!？」

希望相手を書き終えた途端、その契約申込書が後ろから誰かに奪われてしまった。あたしはそれを取り戻そうと振り返ろうとすると・
・・その誰かに捕まえられてしまった。その誰かとは・・・

「あかり〜。お前、お前アリア先輩と戦姉妹登録したいのか？」

ポニーテールで男勝りな性格をしている友人のライカだった。・
・フルネームは日野ライカと言って同じ強襲科だ。

「何すんだろ！このチカン！」

「戦姉妹……あの二人組み特訓制度ですか？」

そう言ってきたおしとやかな少女は志乃ちゃん……フルネームは佐々木志乃と言って探偵科所属だ。

「そうそう、1人の先輩の下で直接訓練を受けつつ、1年間過ごすやつ」

「え、えと・・・間宮さん。君、神崎先輩のランク・・・分かるよね？・・・Aより上のSランクだよ。」

少し不安そうに話しかけてきた男子・・・野上亮太郎のがみりようたろうくんは、こちらにやってくる。一件ひ弱そうに見えるが、これでも仮面戦士に変身するらしい。・・・あたしはその変身を見たことないからどんなのか分からないけど、廊下をうろうろしている5体の‘いまじん’とかいう彼の味方の怪人の力を借りて変身するって本人が言っていた。

「戦姉妹を志望した20人が続けてで不採用だって・・・お前みたいなEランク武偵が選んでもらえる訳ないだろ」

「分不相応っていうんですよ。そういうの」

「・・・間宮さん。無理・・・だと思うよ?」

・・・ひどい言われようだ。

「かえせ〜!!」

涙目のあたしはライカから契約申込書を取り返そうともがくも・・・

「ヘッヘッヘッ、アタシ自ら逮捕術の特訓をしてやるよ!」

「っ!」

あっさりと取り押さえられてしまった。・・・だけど取り押さえで油断しているライカから。あたしは‘あの技’で・・・

「・・・あちゃあ・・・」

ターゲットを見ると、弾道はすべて左に逸れてしまっていて中心には一発も当たっていなかった。すると蘭豹先生は一度ため息をついて、親指で後ろを指す。

「あれ見ろ！」

「っ？」

「・・・・・・」

バンッ　バンッ

蘭豹先生の指した先にはアリア先輩があたしのマイクロUZ Iよりもずっと強力なガバメントを2丁銃でターゲットの中心を狙い撃ちしていた。・・・あたしと同じ幼児体系のはずなのに・・・スゴイ！スゴイ！！

「だから・・・」

だからあたしだって強くなって見せるんだ！！・・・強くなれば・・・もう、あんな思いをしなくて済む。

「オイ！コラッ！後藤！お前2年なのにどんだけ銃の命中率悪いんだよっ！」

「い、いえ・・・この銃は初めて使うのでまだ弾丸が逸れてしまうような感じで・・・」

「言い訳してんじゃねえ！明らかに半分は外してるじゃんか！だか

「なんなら近接戦技ならアタシが教えてやろうか？」

ホットドッグを食べながらそう言ってきたけど……

「ライカはバカでHだからやだっ」

「なっ!？」

訓練中にセクハラをしてから遠慮した。するとライカはガンという表情をしてから、あたしを指差す。

「バカなのはそっちだぜ! アリア先輩は強襲科のトップ! お前はビリ!! 組むどころか、口を聞けるチャンスすらねーよっ!」

「そうですよあかりさん。人には適正や……身の程というものがあるですよ」

ライカの言葉に志乃ちゃんも続ける。……やっぱりあたしなんかじゃ駄目なのかな? ……そう思ったあたしはスコアが書かれた用紙を強く握り締めた。……その時だった。

「あたしは……チャンスは誰にでも平等にあるべきだと思ってる」

「えっ?」とあたし達は声の方向に振り返ると……

「武偵は場在戦場、もしあたしが敵だったら……頭に風穴が開いていたわよ!」

桜の木の上にアリア先輩が腕を組んで立っていた。そして2丁拳銃を抜いたアリア先輩は銀色のガバメントをあたしに向けて……

「間宮あかり、戦姉妹を掛けてあたしと勝負よ！」

思ってもなかった事を言ってくれた。

間宮あかり（後書き）

本編も進めないといけないのでこちらの更新は日曜日だけですが入ってくれると幸いです。

エンブレム（前書き）

第2話です。この物語は主人公は変身しませんが、この作品でも
ようやく1人のライダーが変身します。

エンブレム

「間宮あかり。あたしの戦妹になりたいなら・・・あたしと勝負よ！」

あたしにそう言ってきたアリア先輩はふわりと桜の木の上から降りてくる。

「チャンスは誰にでもあるべきだわ。・・・でも、結果は平等じゃない。努力しだいよ」

「あたしは忙しいの。教務科の命令でも無条件でお守りなんかしないわ。だから『エンブレム』今からやるわよ」

アリア先輩はあたしに星型のシールのような何かをあたしに見せてくると・・・自分の服を捲って腹部の素肌を晒した。・・・ま、まさかこれって!?

「い、いきなりそんな!! 外だし、友達も見えますし、何より心の準備がっ!」

「バカ・・・何勘違いしてんだよ。『エンブレム』のルールを知らないのかよ?」
ガツンッ

ライカは後ろからあたしの頭を軽く叩きながらそのように言ってきた。

「エンブレムのルール?」

何それ？

「戦姉妹契約は契約前に試験があるんです！強襲科推奨の戦姉妹試験勝負。それがエンブレムルールです」

志乃ちゃんがそう説明すると・・・アリア先輩は腹部にエンブレムを貼り付ける。

「30分以内にあたしから、この『エンブレム』を奪ってみなさい。これを取れない者とは契約しない。今まで全員、それで不採用にしてきたわ」

え？・・・そ、そんな取れない者とは契約しないだなんて・・・。

「さあ、勝負はもう始まってるわよ」

アリア先輩の差し出してきた携帯には残り29分59・・・58秒とドンドン時間が減っていた。

「そ、そんなの無理ですよ。できるはずが・・・」

「チャンスは人を待たない。事件が武偵を待ってくれないのと同じようにね」

ど、どうすればいいの？

「あかり！」

「あかりさん！」

ライカと志乃ちゃんは「やるしかない」と言った感じにあたしの名前を呼ぶ。

「くっ・・・うわあああっ！」

あたしは何の策もなしにただがむしやらにアリア先輩に挑みに行くも・・・

「・・・」

バタアアアン！

「っ！？」

右手を掴まれて背負い投げをされてしまった。・・・危うく手首を外されそうになった。

「ハアアアアッ！」

あたしはもう1度アリア先輩に挑もうとするも・・・アリア先輩は桜の木を蹴り跳攀法であたしの後ろまで跳ぶ。

「あうっ！？」

ドカツ

そしてあたしは後ろから軽く押されて隣の木にぶつかってしまった。

「間宮さん！素手じゃ駄目だ！」

あたしがアリア先輩に挑んでいることに気づいた亮太郎くんがライカ達のところにやってくると、そう叫んでくる。

「銃でもナイフでも使いなさい」

「・・・っ！」

ブンっ

ナイフを取り出したあたしはアリア先輩に向けてナイフを振るうも・・・ナイフを握る指と指の間を日本刀で突かれて、その刃がナイフの柄に刺さりナイフを奪われてしまった。

「武器は何があっても放しちゃ駄目よ」

アリア先輩・・・いつも手を抜いてない。・・・そう思ったあたしは銃を取り出してアリア先輩に向けようとするも・・・

「っ!？」

ほんの一瞬でアリア先輩のガバメントと刀に銃口を逸らされてしまった。

ダダダダダダッ

「ああ!？」

そのせいであたしは引き金を引いてしまい、銃弾は無駄に発射されてしまう。

「ムダ弾は使わないこと」
ダァン

「うっ!？」

アリア先輩はあたしの防弾制服のスカートの部分を狙撃する。防弾なのでケガはないんだけど・・・かなり痛い。これがアリア先輩の拳銃格技・・・強すぎる。これがSランク武偵の実力。

「あかり！」

「あかりさん！」

「間宮さん！」

銃弾があたった場所を押さえながらしゃがんでいると・・・ライカ達があたしの所にやってくる。

「大丈夫か、あかり！」

「だ、大丈夫・・・防弾制服だから・・・」

アリア先輩、厳しいけれどちゃんと教えてくれている。

「あれ？アリア先輩は？」

先ほどまで前に立っていたはずのアリア先輩は気がつくといなかった。

「あっちにいったよ」

亮太郎くんの指差す方向を振り向くと・・・アリア先輩は校門の

前に立ってこちらを振り返っていた。

「おいで！鬼ごっこしよ！」

アリア先輩は遠くからこちらに手を差し伸べている。・・・ようするに「あたしについてこれるか？」と誘っているんだ。・・・あたしは不安げに立ち上がると、ライカ達はアリア先輩からあたしの方に目を移す。

「あかりさん。規則上助太刀はできませんが・・・ご武運を」

「頑張れあかり！」

「間宮さん。ファイト！」

志乃ちゃんもライカも、それに亮太郎くんも応援してくれる。・・・こうなったら頑張らない訳にはいかないよね。

「・・・無理かもしれないけど・・・行ってくるよ！」

残り時間23分・・・あたしはアリア先輩を追いかけ始めた。・・・するとライカ達の所に1体の赤鬼のような怪人が走ってきた。

「おい、亮太郎！」

「・・・どうしたのモモタロス。そんなに慌てて？」

「あのチビ女2人が走っていった方から変なにおいがした！たぶんこのねっとりとした感じはドーピングだ！」

「・・・なるほどドーパントだね。それじゃ・・・間宮さんの助太刀っぱくならない程度に相手をしよっか」

「応っ！そうと決まればとつと行こうぜ！」

赤鬼のような怪人は駐車場に向かうと独特の形をした白と青のバイク‘マシンデンバード’に跨り、亮太郎くんも後ろに乗せて走り出した。

アリア先輩は武偵高駅から最寄の駅に向かい色んな場所を駆け抜ける。あたしはそんな走りまくるアリア先輩を追いかけているとすでに残り時間は15分となった。・・・あたしは現在、斜張橋の柱のてっぺんに立っているアリア先輩のところに向かおうと涙目で登っていた。・・・高くて怖い。だけど・・・。

「チャンスは……待ってくれない」

「ねばるなあ。普通はもう追ってこないのに・・・」

何とか登り終えたあたしはアリア先輩の前に立つ。・・・あたしは恐怖での肩や足・・・身体全体が震えている。だけど・・・ここです。諦めたりなんかしない。アリア先輩の戦妹に絶対になるんだ。

「……ってやっぱり無理です！こんな高い所……怖くて立って
いられません。……せめて下で……」

「……」

不安がっているあたしにアリア先輩は携帯のタイマーを見せてく
る。その残り時間はすでに10分程度になってしまっていた。

「邪魔が入ったみたいだけどタイマーは止めないわよ。それがルー
ルだから」

「じゃま？……っ！！」

下の道路の方を見ると、車輛科の運転しているバスがマシンガン
などを持った男達が乗っている数台の車から襲撃を受けていた。襲
っている男達の腕には蛇のような独特の刺青が見える。……たし
かあれ、今朝アリア先輩が倒した奴らもやっていた刺青だ。

「あの刺青は今朝の……」

「やっぱり仲間がいたのね。あんたはそこで大人しくしてなさい」
バツ

アリア先輩はワイヤーを握ると下に向かって飛び降りていった。
「犯人グループの仲間から襲撃を受けている！至急、強襲科と狙撃
科の応援を早く……」

「強襲科だけでいい？」
バンッ！バンッ！

「グアッ!?!」

「グッ!?!」

バスが倒されてピンチとなり通信を取っていた車輛科の生徒達の前にアリア先輩が立つと、アリア先輩は拳銃の狙撃で次々と男達の銃を撃ち落す。

「事件は・・・武偵を待つて・・・くれない」

あたしはアリア先輩の言っていた言葉を思い出すとワイヤーを使って下り始める。すると下では1人の男はキーを持って車に乗り込んだ。

「クソ、あの小娘!」
ブウウウンッ!

男は次々と仲間を倒しているアリア先輩に向かって車を走らせる。このままじゃアリア先輩が轢かれちゃう!

「死ネーーーーー!!!」

「あぶないっ!」
ドカッ!

「っ!!!」

アリア先輩が車と接触する寸前にあたしは背中を蹴って突き飛ばす・・・

「っ!？」

ズドンッ

あたしが車に撥ね飛ばされてしまった。

「あかり！」

アリア先輩は轢かれたあたしを心配して駆け寄ってこようとすると……

「……いた〜い!!」

あたしは血が出ているおでこを押さえながら立ち上がった。

「……クソ、コウナツタラ奥ノ手ダ！」

『BAT』

車から降りた男はUSBメモリのようなものを取り出すと……それを起動して自身の手の甲に指す。すると男の身体は蝙蝠のような怪人の姿に変化した。

「ひっ!？か、怪人っ!？」

「メモリによる変化……ドーパントね。それに白いけど蝙蝠みたいな見た目……さしずめバッドドーパントってところかしら」

アリア先輩は冷静に怪人を分析しながら少し後ずさる。

「ど、どうしましょうアリア先輩!？」

「・・・さすがにあたしでも怪人はどうしよもないわね」

冷や汗を欠いていたアリア先輩は銃口をバットドーパントに向けて
ようとしたその時・・・

「なかなかクライマックスになってんじゃないかよ！」

「ちょ、ちょっとモモタロス、不謹慎だよ！」

あたしとアリア先輩の前に二人乗りをしていた1台のバイクが止
まった。バイクに乗っているのはいつも廊下をうろうろしている赤
鬼と亮太郎くんだった。

「わりいわりい。それよりも亮太郎！入学して初めての戦いだ！気
合入れていくぜ！」

「・・・うん、そうだね。モモタロス、行くよ！」

赤鬼っぽい見た目の‘いまじん’・・・さっき‘モモタロス’って
呼ばれていた怪人は半透明になって亮太郎くんの身体に入ると、亮
太郎くんの髪が逆立って赤いメッシュが入る。‘いまじん’が取り
憑くと普段大人しい様子の亮太郎くんが不良っぽくなるっては噂で
聞いていたけど・・・何か変な感じだなあ。

「今から俺のカッコいい変身を見せてやるからよく見とけ」

亮太郎くんは中央に‘T’のようなマークがついたベルトを腰に
巻きつけると・・・ポケットからパスを取り出す。

「変身っ！」

『SWORD・FORM』

そしてベルトのTの部分にパスをセタッチさせると、亮太郎さんの身体は電車のレールのようなものがついた黒いアーマーを纏ったかと思うと・・・各部に赤い鎧と頭部に桃のようなものを装着する。そしてその桃が割れて仮面になったかと思うと、その戦士は親指で自分を指す。

「俺、参上！」

さらに亮太郎くんが変身した赤い仮面戦士は決め台詞っぽいことを言いながら歌舞伎役者のようなポーズを決めた。

「キ、貴様ハ何者ダ!？」

「俺か？俺は仮面ライダー電王。そんで持つて言っとくが・・・俺は最初っからクライマックスだぜ！」

仮面ライダー電王と名乗った仮面戦士は腰についている4つのパーツを組み立てて剣にすると、チンピラが金属バットを振り回すようにバットドーパントに向かって走っていった。

エンブレム（後書き）

欲望の欠片の初変身ライダーは電王となりました。次回は電王V
S バットドローパントと試験の結果にしたいと思います。

電王と試験（前書き）

欲望の欠片の第3話です。今回はいつもよりちょっと短いです。

電王と試験

「いくぜいくぜいくぜえええ!!」

亮太郎くんが変身した電王はまるで鉄パイプを振り回すヤンキーのように剣を振るう。

「おらおらっ! まだまだ行くぜ!」

「グッ!？」

バットドーパントは翼で電王の剣を受け止めるも何度も剣を受けているとさすがに怯み始めた。

「あれが・・・亮太郎くんの変身する仮面戦士・・・」

てつきり亮太郎くんのことだから、あたしのように引き腰で戦うかと思っていたんだけど・・・予想とは全然違うなあ。やっぱりあの戦い方はさつき亮太郎くんに入っていた‘モモタロス’のせいなのかな？

「・・・っ!」

・
バットドーパントは電王の剣を掴むと首筋に噛み付こうとするも・

「気持ち悪いんだよ!!」
ドカッ!

電王はバットドーパントをヤクザがするような蹴りで離れさせた。

「ッ！！」

キイイイイン！

「「うっ！？」」

電王に追い詰められたバットドーパントは空へ飛び上がり超音波のような奇怪な音を響かせると・・・辺りの車が誰も乗っていないのに動き出した。

「うおっ！？何だ！？」

突進してきた車を回避した電王は勝手に車が動き出したことに驚いた反応をする。

「おそらくけど・・・さっきあのドーパントががなった音波で周辺の車が操られているような感じね」

「バカやろう！！せっかく久々の戦いなのに変な技使ってんじゃないやねえよ！」

電王は正面から突っ込んできた車を片足で踏みつけるようにして止めると空中を飛んでいるバットドーパントに苦情を言う。

「~~~~ッ！！」

バットドーパントは電王に向かって何かを言うが・・・やっぱりあたしは何を言ってるか分からなかった。

「・・・アリア先輩。あのドーパントは何を言ってるんですか？」

「簡単に言えば・・・あの仮面戦士を馬鹿にしてるわね。中国語で『脳筋単細胞』やら『勝てば官軍!』と言ってるわ」

「何ごちゃごちゃ言ってるんだ!? 日本語話せ!」

『・・・言えるんなら最初から言ってたと思うよ』

どうやら電王もバットドーパントの言葉は通じていなかったらしい。・・・それに何か今、電王から亮太郎くんっぽい声が聞こえたような・・・。

「~~~~っ!!」

「やる事が単純なんだよっ!!」
ブウウウンッ!

イラついている様子のバットドーパントは周囲の車やバスを一斉に電王に突撃させる。すると電王はバイクに跨り前輪を軸に後輪を上げて1回転をして車やバスのタイヤを壊して走行を不能にした。

「そろそろ決めるぜ」

『FULL CHARGE』

電王は変身するときに使っていたパスを再びベルトにセタツチすると剣の刀身が赤い電撃を纏ったように発光し始めた。

「俺の必殺技パート1!」

そう言った電王はバットドーパントへ向かって走り出すと……

「……と、思ったけどやっぱり剣が届かないからパート2!!」

その真下で止まって剣の刀身だけをバットドーパントに向かって飛ばした。

「ッ!?!?…阿アアアアッ!?!」

ドカアアアアン!

明らかに不意を突かれてしまったバットドーパントは電王の必殺技パート2を喰らって爆発した。

「っ!?!」

ガシャンッ

ドーパントとなっていた男は、その一撃でメモリが碎かれたせいで人間の姿に戻ったらしく、空中の爆発の中から地面へと落下してきた。

「まったく……世話を焼かずぜ」

落下してきた男を捕まえた電王は、ゆっくりと男を地面に下ろすとベルトを外して変身を解除した。

「そこのお前!こいつをとっと取り押さえろよ」

「……あ、ああ。分かった!」

男の身柄を近くにいた生徒に預けた亮太郎くんの身体からモモタ

ロスが抜け出てきた。

「・・・ふう。モモタロス、お疲れ」

「亮太郎もな」

「だけど僕達は早くこの場を離れないと・・・」

「え？何でだ？」

モモタロスはまだ暴れ足りない様子で右肩を振りながら亮太郎くに質問した。

「間宮さんが神崎先輩に戦姉妹の試験勝負を挑んでいるんだよ。僕も城戸先輩に挑んでたでしょ」

どうやら亮太郎くんはあたしのことを気遣って離れようと言ってくれているらしい。

「あれが・・・勝負？ただのジャンケンだったじゃんかよ」

「だって僕も城戸先輩も仮面戦士同士で戦うのは嫌だったんだし・・・」

えっ？亮太郎くんの試験勝負・・・ジャンケンで決まったの？そんなに決めちゃっていいの？・・・まあお互い争いが嫌いだったんなら仕方がないと思うけど。

「まあいい。つまりあれだろ？『俺たちがここにいたら迷惑になっちゃうかもしれないから、気にせず戦ってもらうためにも帰ろう』」

ってことだろ？」

「そういうことだよ」

「まあ・・・俺も自分の戦いにちよつかいを出されんの嫌だからな。・・・そうだ亮太郎！さっきバイク運転してるときに見かけた店のクレープを食いに行こうぜ！」

そう叫んだモモタロスはクレープを食べるために走り出した。

「まっ、待ってよーモモタロスー」

そして亮太郎くんは乗ってきたバイクを押しながらモモタロスの後を追いかけていった。どうして亮太郎くんはバイクを運転してモモタロスを追いかけないんだろ？そういうえばここに来る時もモモタロスの後ろに乗っていたし、さっきのバイクでタイヤを壊してたときもモモタロスが取り憑いてたし・・・もしかして亮太郎くん自身は運転できないのかな？

「・・・あかり」

あたしがそんなことを考えているとアリア先輩は携帯の画面をあたしに突きつけるように見せてきた。

「時間・・・まだあるわよ」

「・・・え？」

そんな気の抜けた返事をした途端・・・アリア先輩は再び走り出した。

電王がバットドーパントを倒して事件も解決して数分後、あたしはアリア先輩を追って橋の道路の外側に立った。

「うゝ」

右側には手すりなんてなく、下手に動いたら海に落ちてしまう。

「泣きそうな顔しながらも……結局どこまでも追ってきたわね」

残り時間・・・1分と2秒。あたしは半泣きになりながらもアリ
ア先輩と向かいっていた。

「ご褒美に最後のチャンスあげる」

「えっ！？　ここでですか！？　ム・・・」

あたしは「無理」と言おうとすると・・・

「その代わり・・・もう『無理』なんて一生言わないこと。それは人間の持つ無限の可能性を自ら押し留める良くない言葉よ」

そのように言われてしまった。

「・・・っ!!」

決意を固めたあたしは左手を手すりから離して強く握る。

「アリア先輩・・・あたしを襲ってください」

「・・・？」

アリア先輩は「理由を聞かせて」とでも言うようにこちらの顔を覗ってくる。

「先輩・・・ずっと逃げていた。・・・逃げるアリア先輩とは私も戦姉妹になりたくありません」

あたしがアリア先輩に向かってそう言うとき・・・アリア先輩は一度拍子抜けしたような表情になると腰に両手を当てて軽く目を瞑る。

「言ったことは・・・取り消せないわよっ!!」
ダッ!

アリア先輩はあたしに向かってバーリ・トウードを仕掛けようと迫ってくる。そう・・・ギリギリまで引き付けないといけないんだ。あたし・・・この技を使えるのはカウンターの時だけだから。

「・・・」
パン!

「っ!!」

あたしはアリア先輩のバーリ・トウードで吹き飛ばされて海へと

落下する。

「えっ！？ちよっ！？強襲科のくせに落ちるの！？」
バシヤアアアン！

アリア先輩が「ワイヤーを使いなさいよ！」と叫んだのを聞き取ったあたしは、そのまま春先で冷たい海水に浸ってしまった。

あたしには夢がある。

浮かび上がってきたあたしはエンブレムを握ったその手を海面上に出す。

「取りました！」

アリア先輩みたいになるんだ。

服をめくり上げ腹部を確認したアリア先輩は、たしかにエンブレムがなくなっていることに気づく。

「っ!?!?・・・今、交錯した一瞬でスリ取られたの?・・・ってことはさっきの鍵を取ったのは偶然じゃなかったってことね」

アリア先輩は何かを言っているけど・・・波の音のせいで聞き取りにくかった。

「これで私たち戦姉妹ですよね!!」

あたしは漁船の網に引っ掛かりながらもアリア先輩に向かって叫ぶ。・・・うわっ何かあたしの頭にタコが乗ってるよ。

「ちよっ!?!? 離れ・・・おうえ!?!」

網に引き上げられていたタコが次々とあたしに絡み付いてくる中、アリア先輩はこちらの様子を見て少し笑った。

「あれが・・・あたしの初めての戦妹か。・・・悪くないわね」

色々トラブルもあったけどあたしはアリア先輩試験勝負に勝利し・・・アリア先輩の戦妹となった。

電王と試験（後書き）

『欲望の欠片』最初の仮面戦士は電王でしたが、これからどんどん他の仮面戦士も登場させたいと思います。もちろん本編の主人公であるオーズも出すつもりです。

戦姉妹（前書き）

今回の序盤はあまり原作と変わりありません。

戦姉妹

町の何でも屋『武装探偵』を育成する東京武偵高では‘戦姉妹’
という制度がある。それは姉妹のように先輩が後輩を育成する制度
である。

「……………」

エンブレム対決後の夜、19時。あたしは今、アリア先輩と一緒に
歩いている。これからアリア先輩みたいに活躍してSランク武偵
になるんだ！

「ここよ！」

そんなことを考えながら歩いていたあたしはアリア先輩の部屋へ
と案内される。女子寮のVIPルームに入ることができるなんて・
・夢にも思ってたよ。

「……………はい！」

「……………」

アリア先輩はあたしに1枚のカードを渡してくる。これってもし
かして……………カードキー？

「戦姉妹はまず部屋の鍵の共有から始めるのよ。これから色々と手
伝ってもらうからね」

「は、はい！先輩！あたし、頑張ります！」

そう答えたあたしはアリア先輩に続いて部屋の中に入っていくと・
・高価そうな家具がいくつも置かれていた。

「わぁ・・・広い」

おっきな家具なのに部屋にはかなりのゆとりがある。凄いなあ！

「実家の方はこの10倍くらいあったわよ？」

「実家って・・・イギリスの・・・」

「あんた戦姉妹だから言うけど、あたしは貴族なの。ホームズ家の嫡女よ」

「ホームズ？」

ホームズって・・・まさかあの教科書にも載っているあの名探偵
シャーロック・ホームズのこと！？

「シャーロックホームズ。教科書にも載っていたでしょ。あたしは
その4世。・・・と言ってもあたしの私財の半分は相続財産よ。自
分で稼いだのは半分。だから褒めたり驚いたりするのも半分にしな
さい」

うわぁ！アリア先輩のすごい秘密を知っちゃったよ！

「Hi Sarah, This is Aria. Speak in
g Yeah, I'd Like to talk about

my bullets」

アリア先輩は携帯で英語でサラという人物に電話をする。

「ねえあんた。超偵犯対策の純銀弾・非法化・装備科とS研に渡りかけてる？」

「・・・・・・・・」

専門用語が多くて何のことだかさっぱりだったので・・・あたしは首を横に振る。

「Sorry Sarah」

あたしは後ろめたい気持ちになり、アリア先輩から目を逸らすと・・・アリア先輩は電話を終えて木の箱を持ってくる。その中にはよく分からない機材がいっぱい入っていた。

「電波を追っている件があるの。発信源を絞れてきたから八木も併用するわ。これ、組み立てておいて」

アリア先輩は作り方の手順のようなものを渡してくるが・・・すべてが英語で書かれていて正直さっぱり分からない。

「あたしはさっきの件、自分で発注してくるから」

「ちょ!？」

八木って何ですか!?! 分からないことがいっぱいなんですけど!?!

「頼んだわよ」

ボタン

アリア先輩は出かけてしまったため結局これをどうすればいいのかわからないままになってしまった。そしてそれから数十分後……

「あんた……何食べてるのよ……？」

あたしは機材を分解して取り返しのつかない状態にした上に手順の紙を口に加えていた。

「わ、私……分からなくて……先輩がヤギって言ってたから……」

「あーもう。壊しちゃって」

「ごめんなさい。私……私……」

呆れ顔であたしのことを見てくるアリア先輩に……あたしは言葉が見つからずにただ謝ることしかできないでいた。

「あんた、専門バカ……ってワケじゃないみたいだけどさ、武偵は色々できるのに越したことはないんだからね。運転・鑑識・射撃……何でもいいわ。出来ることとかある？」

悔しいけどあたしには何もできることはなく……あたしは首を横に振るしかできなかった。

「付いて来なさい」

一度ため息をついたアリア先輩に連れられて女子寮の屋上に向か

と話していた。

「あかりの歩法とか構えは日本の武道がベースだったわ。でも空手でも柔道でも合気道でもないのよ」

「神崎殿が見た技はおそらく鳶穿。本来は敵の眼球や内臓を素手で筆記取るための技でござるよ」

アリア先輩に説明している生徒は風魔陽菜。諜報科の生徒だ。アリア先輩と風魔はしばらく無言になると・・・

「・・・」

ぐううゝ

風魔はおなかの虫の音を響かせてしまった。

「・・・追加料金よ。もっと教えなさい」

「かたじけない」

アリア先輩はさらにもう1個焼きそばパンを素直に受け取って食べ始める。

「それでは間宮あかりの事はもう少し調べてみるでござる。・・・少し気になることもあるので」

アリアは「安上がりな子ね」と呟きながらも風魔が気になっていたことが何なのかを気にしていた。

「あ……アリア先輩!!」

アリア先輩が縫い終えていたパラグライダーに関心している時・
・あたしは眠りから目を覚ます。

「……この縫い方……?」

「本返し縫いをしました」

パラグライダーの縫い方に驚いた反応を見せたのであたしは縫い方の名称を言う。

「ホンガエシ? 日本の縫い方?」

「ひと縫いするごとに布を左右に引いて、同じ穴に針を通して縫うんです。手縫いの中では一番丈夫な縫い方なんです」

あたしが縫い方の説明をすると……アリア先輩は少しポカンとした表情になる。

「あ……あの! これ、駄目だったら縫い直します! そ……そう
ですよね。指示書に縫い方の詳細がなかったからって私、勝手に・
・」

「駄目な訳ないわ。どこの国でもこんなに丁寧に縫ってくれる子はいなかった。ありがと。あんたの長所1個見つけたわ。いい子ねあんた」

アリア先輩のその言葉にあたしはポロポロと涙を流してしまう。

「アリア先輩・・・ふええ〜！！アリアせんぱ〜い！」

そしてあたしは泣きながらアリア先輩に抱きついた。そして少し泣き止んだあたしはアリア先輩と一緒に部屋に戻って一緒にお風呂に入った。

「そう、そんな事で泣いていたのね」

あたしは自分は何もできないと思っていたからアリア先輩に褒められて・・・少し安心できた。

「泣くことないわよ！あんたがいきなりAランクとかSランクだったら戦姉妹になる意味もないじゃない！だからあんまり頑張らないで。育てきったら次はもっと面倒な子を背負い込むかもしれないでしょ！」

「アリア先輩・・・あたし頑張ります！」

元気を取り戻したあたしは風呂場で勢いよく立ち上がる。

「だから頑張っちゃ駄目だって！てか、前を隠しなさい！」

そしてその日はアリア先輩の部屋に泊まり朝を迎えると・・・隣に眠っていたはずのアリア先輩はすでにいなかった。

「アリア先輩？」

あたしは周囲を見渡すと・・・テーブルの上には置き手紙があった。そこには『パラグライダーありがとう。使わせてもらおうわ』と

後から知ったことですが・・・この時アリア先輩はあのパラグライダーを使って武偵高の生徒を爆弾事件から救い出したらしいです。しかしその後、その生徒は仮面戦士にどういう訳か今まで隠していた個人のライダーシステムで変身したらしく・・・仮面戦士科に転科させられてしまったらしいです。

「ウエエエエイ！」

スピードを思わせる青い仮面戦士は剣はランプのようなカードを一枚スラッシュして駆ける。

52

左腕と胴体、そして複眼を蒼色にしている吸血鬼のような仮面戦士は狼を思わせる剣で青い仮面戦士の剣を受け止める。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そして剣が交差している状態でしばらく無言の時間が続くと・・・青い仮面戦士は数歩後ろに下がってベルトに手をかけた。

「合格だな」

変身を解除したやや長身の生徒はベルトからカードを引き抜くと、吸血鬼のような仮面戦士にそう告げる。

「・・・えっ？この程度でいいんですか？」

『剣崎。もっと厳しく試験してもいいんだぜ？』

それに続いて吸血鬼のような仮面戦士も変身を解除すると・・・ベルトになっていたはずの蝙蝠のような何かはやや長身の生徒を剣崎と呼びながら彼の周りを飛んだ。

「俺の出した試験は『俺にお前の剣術を見せてみること』だ。涉は格闘系だってことは分かっていたけど・・・一応知っておきたくな。お前の剣はまるで猛獣が襲い掛かってくるかのようで止めにくかったぜ。ああいう剣術もあるんだな！」

「い、いえ・・・あれはほとんど次郎さんのサポートで・・・僕はまだ・・・」

「たぶん俺なんかが教えられることはあんまりないと思うけど・・・一緒に頑張ろうな渉！」

「は、はい・・・」

吸血鬼のような仮面戦士になっていた同級生・・・紅渉くれないわたるくん戦徒試験に合格したのに・・・その表情はどこか不安そうだった。

戦姉妹（後書き）

今回の後半は交差の序盤で出番が多かった剣崎と最近少し出番が増えてきた渉の戦徒試験の話が少し入りました。次回は渉の葛藤理由を明かしたいと思います。

紅渉&佐々木志乃 前編（前書き）

今回は未だ本編に登場していない仮面戦士に変身する人物が先に
こっちで出ちゃいます。

紅渉&佐々木志乃 前編

これは半年前・・・まだあたしが志乃ちゃんと友達じゃなかった頃のことだ。

「はしたない・・・」

志乃ちゃんは何だか空しそうに買い食いをしている女子生徒達を眺めていた。

「あっ『勝ち組』だ」

「また1人でやんの」

「美人がお高く止まってるよ」

そして女子生徒達はすれ違いに志乃ちゃんのことをそのように言うてくる。当然志乃ちゃんはいいい気分ではなく俯いてしまう。

「まあ王子様もたしかに1人でいることが多いけど、あの人は対人恐怖症っぽいところがあるからねえ」

「逆に守ってあげたくなる王子様っていうのもいいんだよねえ」

「いいもん・・・私はずっと1人でいいもん」

そう呟いた志乃ちゃんは少し小走りでその場を去ろうとすると・・・どこからともなく美味しそうな香りがただよってきた。

「美味しそう・・・でも買い食いなんか・・・」

「いらっしゃいませ〜！リーフパイですか？」

美味しそうな香りに興味を示した志乃ちゃんはお店の前で足を止めていると店員さんに話しかけられた。

「えっ？」

「お客様ラッキーですよ。最後の一枚です！」

「えっ！？い、いえ私はただ見ていただけで・・・」

何だか買うんだろうとすでに思われてしまっている志乃ちゃんは「仕方がないから買おう」とでも言った表情になる。

「ポイントカードはお持ちですか？」

「・・・？ゴールドカードなら・・・」

「あー・・・クレジットカードはダメなんです・・・」

初めてこういう店で買い物をする様子の志乃ちゃんはポイントカードが何のことか分からずにクレジットカードを取り出してしまい、店員も少し困った様子を見せる。そしてそんな微妙な空気が漂っている中・・・

「間に合った！リーフパイください！」

そして時間は戻り現在。アリア先輩の部屋から登校することになったあたしはいつもよりも少しはやい時間で通学路を歩いていた。

「うーん！やっぱ早起きすると気持ちがいいなあ！」

アリア先輩はあたしなんかよりもはやく出て行ってしまったようだけど・・・少なくとも今日は何時もの遅刻寸前よりはかなりはやい。ライカもどちらかと言うと時間ギリギリにくるタイプなので、今日はまだ見かけていない。

「いつもは通勤ラッシュのように人がいっぱいだったのに・・・不思議なかんじだね」

普段あたしが通学する時間は7～80人ぐらいいたのに、今の時間はまだ10人20人程度だ。この時間じゃまだこのぐらいしか来ていないんだ。

「・・・ん？」

そんなことを考えながら校門を潜ると・・・校門の前には白いリムジンが止まった。・・・いったい誰だろう？

「ご苦労」

そのリムジンから降りてきたのは3年の紅大河先輩くれないたいがだった。紅大河先輩は、ファンガイア族、と言う王家らしく・・・いずれは王様になる人らしい。

「きゃー！大河様よー！」

すると紅大河先輩が校舎に向かって歩き出そうとした矢先・・・何処からともなく大量の女子生徒達が紅大河先輩に道を作るかのよう集まってきた。

「出迎えご苦労。みんなも今日一日頑張ろう」

紅大河先輩は微笑んだ表情で女子生徒達にそう告げると・・・彼女達は「はい！」と言いながらラブレターやら自作のお菓子やらを2人に手渡しをする。紅大河先輩はそれを笑顔で受け取ると・・・仮面戦士の学科棟から涉くんが出てきた。

「涉様よ！」

「涉様～～！！」

涉くんの方にも女子生徒達はプレゼントを渡そうと集まってくるが・・・涉くんはどこか浮かない表情でそれらを無視して校舎へと進んでいった。

「そのクールなように実際はナイーブなところも素敵です！」

「こっちを向いてくださーい」

追いかけてくる女子生徒達も無視して涉くんは進んでいく。・・・ファンガイア族の王家として育った紅兄弟は女子生徒の注目の的だ。そこに本当に愛があるのかは分からないが・・・少なくともあそこに集まっている大抵が玉の輿というものを狙っている。あたしはそんなことに興味はないけど・・・涉くんとは友達になりたいとは思っている。一般中にいた頃は「学校の生徒全員と友達になる男」と

自称していた先輩に色々とおせっかいをされていたが・・・先輩なのに気遣いなく話せてそれなりに楽しかった。その先輩の妹とも友達になってよかったと思ってるし・・・あんな、友達の楽しさ、つてのを涉くんにも分かってもらいたいなあ。

「ああ！？結局いつもとあまり変わらない時間だよっ！？」

あたしが教室に向かおうとしていると・・・涉くんがどういう訳か階段の下に隠れていたことに気づいた。

「どうかしたの涉く・・・」

「どうしてだろう？」

やはり何処か浮かない表情をした涉くんのところに向かおうとすると・・・涉くんは何かを呟いたので足を止めて掃除用具のロッカーの後ろに隠れた。

「・・・僕はこんな血筋に期待された学校生活じゃなく・・・もつと自然な学校生活を送りたいのに・・・みんなと僕とは・・・壁がある。仲良くなっても・・・ファンガイアの本能がその人を傷つけるかもしれない。僕はどうしたらいいんだ？」

そもそもファンガイアってのが何だかよく分からないけど、正直・・・涉くんとあたし達には確かに壁がある。目には見えないけどとても大きい・・・いわゆる心の壁というものが。涉くんが内気な性格をしているせいと言う所もあるけど、王家の人相手にどう接したらいいのか分からないという理由もあって、あたし達も1歩引いている感じがしなくもない。

「よしっ!」

ここはとりあえず自然に接しよう。そう、まずは挨拶だ。あたしはたった今気づいた感じで前に出て涉くんに挨拶をしようとすると・

「おはよう涉く・・・くしゅん!？」

くしゃみをしてしまった。

「お・・・おはようございます。間宮さん」

「う、うん。・・・」

あれ?何か気まずい。ど、どうしよう!?何か言葉を続けないと
もっと気まづくなっちゃう!

「・・・それじゃ・・・ホームルームに遅れるのもあれだから僕は行くね。間宮さんも遅れないようにね」

「う、うん。分かった」

とりあえず気まづい雰囲気は何とかなったけど・・・やっぱり壁はどうにもならなかった。・・・そういえばいつも涉くんの周りを飛んでいる蝙蝠くんを見なかったな。風邪でもひいたのかな?

・
・
・
・
・
・
・

・・・・・・

そして放課後、あたしはライカと今朝起こったらしい事件の話をしていた。

「あかりさん。エステーラの限定シュガーリーフパイが手に入り・・・」

「そっか！！アリア先輩使ってくれたんだ！」

あたしが縫ったパラグライダーを使ってくれたことに喜んだ途端・・・あたし達の所にやってこようとしていた志乃ちゃんがピタリと止まったことに気づいた。

「アリア・・・先輩？」

「あっ！志乃ちゃん！」

志乃ちゃんはアリア先輩の名前を呟くいて、どこか不快そうな表情を見せた感じもしたが・・・気のせいかなと思ひ話を続ける。

「今朝第2グラウンドで爆弾事件があつてさ。そんでたまたま現場の近くにいてさ」

「アリア先輩がね！被害者をパラグライダーで救出したんだって！それね、あたしが縫ったんだよ！アリア先輩のために！」

「・・・アリア先輩の・・・ために・・・」

何だかさつきから志乃ちゃんの目が恐い気もするけど・・・それ

よりもあたしの気持ちはアリア先輩がパラグライダーを使ってくれた喜びを優先した。

「そう！空からバーーっと救出！！アリア先輩カッコいい！！」

「・・・よかったですね。じゃあもう帰りましょう。これを食べながら」

そう言った志乃ちゃんはリーフパイの入った袋をあたし達に見せてくる。けどあたしは食べたいなあと思いながらも昨日アリア先輩に言われたことを思い出した。

「あっ今日は駄目なの。アリア先輩の外泊用に荷造りしなきゃいけないの。それに今あたしお菓子NGなんだ。アリア先輩とお風呂に入った後で体重コントロールを命じられたから」

「なっ!?!」

志乃ちゃんは背景に電撃が見えそうな驚きの表情をする・・・あたしは時刻を確認する。

「あっ!?!もうこんな時間。それじゃあまたね〜!」

「・・・・・・・・」

フラッ

あたしがアリア先輩の荷造りをするために急いで教室を出て行く・・・志乃ちゃんは貧血でも起こしたかのように倒れそうになった。

「おっと」

ライカは志乃ちゃんが落としそうになった袋をキャッチすると、志乃ちゃんは体勢を取り直す。

「あいつ今朝のことを話してからずっとアリアさんのことばっか。よっぽど好きなんだなあ・・・んあ？気分でも悪いのか？」

その袋からリーフパイを取り出したライカは1人モグモグと食べ始めたライカは顔色の悪い志乃ちゃんにどうかしたが聞いてみた。

「はい。ちょっと気分が・・・お先に失礼しますね」

そうライカに告げた志乃ちゃんは教室を出ると急いで家へと帰っていた。

大きな豪邸のような家に帰宅した志乃ちゃんは・・・だいぶ荒れていた。

「何よっ！アリア先輩アリア先輩って！あかりちゃんは！私の！お友達！・・・なのに！！」

ソファアーを何度も蹴ったり、自身の部屋の人形をソファアーに叩きつけたりして自身のストレスを物にぶつけていた。

「ふー・・・このままじゃあかりちゃんが取られちゃう。・・・そうよ、落ち着くのよ志乃。まずはあかりちゃんボックスであかりち

「やん成分を摂取」

そう呟いた志乃ちゃんはベッドの近くにある箱の中からあたしそっくりの人形を取り出して抱きしめた。

「あかりちゃん！」

そしてそのままベッドに倒れこむと毛布を頭から被ってサナギのような状態になる。

「・・・うんうん！そうよね！やっぱりおいしいよねリーフパイ。あたしのパイもどうぞ。なんちゃって・・・あっあかりちゃん。・・・などと言う現実逃避をしてる場合ではありません！」

ベッドから起き上がった志乃ちゃんはパソコンの前のイスに座り眼鏡をかける。そしてパソコンで『学校うらサイト』というタイトルのついたサイトでアリア先輩の情報を集め始めた。

「神崎・H・アリア。Sランク武偵、双剣双銃のアリア。バーリ・トゥード使い。14歳からロンドン武偵局に所属。欧州各地で活躍し、99回連続で事件を解決。しかもすべて一発逮捕。1年生3学期より東京武偵高に転校。・・・強い。これを直接抹殺するのは無理そうだわ」

志乃ちゃんはパソコンの画面を見てぐぬぬと悔しそうにすると壊してしまいそうな勢いでキーボードをひたすら叩いた。

「志乃様」

「お食事をお持ちしました」

佐々木家のメイドさん2人は心配そうな表情で志乃ちゃんに食事を運んでくるが……

「そこに置いておきなさい!!」

$\vdash$
 $\vdash$
 $\bullet$
 $\bullet$
 $\bullet$
 $\bullet$
 $\vdash$
 $\vdash$

怒っている様子の志乃ちゃんを落ち着かせることはできなさそうだった。やがてパソコンと向かい合ったまま時間は過ぎていき……とうとう朝日が昇り始めた頃……

「こっ……これだわ！これならあかりちゃんを取り戻せる！」

志乃ちゃんはどうやく自身が求めていた情報を発見すると……そのままパソコンの前で崩れるように眠ってしまった。

志乃ちゃんがパソコンと向かい合って何かを調べまくっている頃、あたしはアリア先輩の荷造りを手伝っていた。

「あの一アリア先輩。外泊っていつまで何ですか？」

「そうね。・・・あいつが落ちるまでだから目処はつかないけど・・・あかりは1人でもちゃんとしないさい。あたしの戦妹なんだか

らできるよね？」

「はいっ！一人でもちゃんとします！」

アリア先輩とこのように約束した翌日・・・まさかあんな事件が
起こるなんてまったく考えていなかった

紅渉&佐々木志乃 前編（後書き）

もちろんこのスピンオフであるこっちでもグリードやヤミーが登場します。そして次回・・・その1体目が登場です。

紅渉&佐々木志乃 中篇（前書き）

前回の更新からだいぶ日経ってしまってますみません。久々の更新です。

紅渉&佐々木志乃 中篇

アリア先輩が外泊してしまつて次の日の朝、志乃ちゃんは1人で学校への道のりを歩いていた。志乃ちゃんの登校時間はあたしなんかが普段学校に向かう時間よりは早い時間帯で、辺りにはまだ人通りが少なかった。

「ああ・・・あかりちゃん」

「・・・フフツ」

携帯の待ち受けを見ながら歩いている志乃ちゃんの後ろには黒い豹やライオンにも見えなくはない猛獣のような怪人が立っていたが・・・志乃ちゃんは気づいていない。

「絶対にアリアなんかにあかりちゃんを渡さない」

「丁度いいね！その欲望・・・開放しなよ！」

「えっ？」

チャリン！

志乃ちゃんが後ろから聞こえてきた謎の声に振り返ろうとすると・・・志乃ちゃんの額には投入口みたいなものが出現して、そこに銀色のメダルが入れられてしまった。

「さあて・・・君の欲望ではどんなヤミーが育つのかな？」

後ろに立っていた黒い豹やライオンを思わせる怪人はそんなこと

を呟きながら何処かへと立ち去っていった。

「あかりちゃんを取り戻す・・・あかりちゃんを取り戻す」

だけど志乃ちゃんはその怪人なんて気にもせずひたすらそのことを呟きながら学校へと歩いていった。

『……こいつは大変だぜ。早く渉に知らせねえと!!』

いつも涉くんと一緒にいるしゃべる蝙蝠は、その一部始終を目撃していた様子だったらしく、そのことを涉くんに知らせるためにどこかに飛んでいった。

「取り戻さなきや。取り戻さなきや」

ようやく午後の授業も終わって放課後、あたしは帰宅しようと廊下を歩いていたら志乃ちゃんに出会った。

「志乃ちゃん！」

「あかりさん、お疲れ様。一緒に帰りましょ」

「うん!・・・ってあれ? 志乃ちゃん、それどうしたの?」

志乃ちゃんの首筋には何やら包帯のようにも見えないアザのようなものがあった。

「・・・?」

どうやら本人もそれには気づいていなかったらしく、志乃ちゃんはその部分を軽く擦ってみる。

「・・・特に何ともなさそうです。行きましょうあかりさん」

「え? 本当に大丈夫なの?」

「・・・はい」

何だろう。・・・何だかいつもの志乃ちゃんとは少し違うような気がするんだけど、気のせいかな?

「・・・」

『・・・』

それと志乃ちゃんと会ってからやけに後ろから視線を感じるのも気のせいかな?・・・あたしは恐る恐る後ろをちらりと見てみると・・・そこには涉くんとその相棒っぽい蝙蝠がいた。

「ねえキバット。こんなことしなくても・・・」

『馬鹿やロウっ！俺はお前をそんな軟弱な子に育てた覚えはないぞ！男ならしっかり尾行しろよ！』

「・・・それはすでに男らしくないよね？」

あの蝙蝠・・・キバットって言うんだ。涉くんって自分のことをあまり人に話すところをみたことがないから初めて知ったよ。だけど涉くんもキバットも・・・そんな普通のボリウムで会話をしていたら尾行の意味がないと思うよ。

「あかりさん、そろそろ・・・」

「う、うん。そうだね！」

あたし達は帰宅のために外に出て行くと・・・

『涉！移動し始めたぞ！』

「分かったよ」

涉くん達もあたし達を尾行するために移動し始めた。それにしてもどうして涉くん達はあたし達を尾行しているのかな？視線を感じたのは志乃ちゃんと合流してからだから・・・追っているのは志乃ちゃんってことだね。志乃ちゃんが尾行されるようなことはしてないと思うし・・・そもそも仮面戦士科の涉くんが尾行なんて探偵科のようなことは、考えにくい。普通は探偵科の誰かに依頼をするはずだ。だとすると・・・自分で尾行する答えは1つ。

「きっと志乃ちゃんが好きなんだ」

「っ!！」

そうだ!きつとそうに違いない!ってあれ?どうして志乃ちゃんの顔が真っ赤になってんの?さっきまで涉くんに見向きもしてなかったのに・・・もしかして涉くんの視線に気づいてあたしと同じ結論にたどり着いたんだね!

「えっと・・・頑張ってね志乃ちゃん!」

「はっはい!何をどのように頑張ればいいのか分かりませんが、頑張ります!」

とりあえずあたしは2人の関係を近くで温かく見守ることにしよう。

「はあ~~~~。それにしてもあたし、いつ野良戦妹から復帰するのかなあ」

とりあえず後ろにいる涉くん達は気にしないことにして、あたしはそんなことを愚痴ってしまう。だってアリア先輩がいないんじゃ、実際教わることができないんだからホントに野良みたいじゃん。

「あかりさん。よかったら私の家に来ませんか?お夕飯をごちそうしますよ」

「えっ?いいの!?行く行く〜!そういえば志乃ちゃんの家に行くの初めてだね!楽しみ〜!」

あたしはそのまま志乃ちゃんに案内されながら志乃ちゃんの家に向かっていった。そして志乃ちゃんの家に着いたあたしはメイド

さん達に鞆と銃を預けて夕食を食べ始めた。

「おいし〜！えっと志乃ちゃん、この葉っぱも食べていいんだよね？」

「ええ、キャラウェイの若葉は肉の臭みを取ってくれるんですよ。パセリの仲間です」

「へえ〜！」

パセリにもこんながあるんだと思いながらデザートを食べ始めると・・・また志乃ちゃんが説明をしてくれた。

「そちらのレモンバームには沈静・強心作用があります。戦闘の前に一枚噛んでおくと全力が出せるんです」

「へえ〜。志乃ちゃん物知りだねえ〜。女子グループって必ず1人はいるよね。ハーブとかに超詳しい子」

「そんな・・・それほどでも・・・」

志乃ちゃんがさっきからあたしを見る目がいつもと違う気がするなあ。今日一日ずっと志乃ちゃんに感じている違和感は何だろう？

「あかりさん、中庭に行ってみませんか？」

「うん！」

あたしは志乃ちゃんに着いていって中庭にやってきた。

「夜に歩かせちゃってすいません。でも食後にちよつと歩きたかったから・・・」

「お散歩できるくらいのお庭があるのがすごいよね」

辺りにはあたしが知らない花がいっぱいあって本当にいい家だなあ。

「・・・そろそろ寒くなってきたね。戻ろっか」
ガチャ ガチャ

「あれ？」

そろそろ寒くなってきたので屋敷の中に戻ろうとドアを開けようとする・・・鍵が掛かってしまっているようで開けなかった。

「志乃ちゃん。ここ鍵閉まっちゃってる。・・・志乃ちゃん？」

後ろを振り返ってみると、志乃ちゃんは花壇にあるレモンバームの葉っぱを一枚手に取った。

「あかりさん。『3日内解消規制』・・・ご存知ですか？」

「・・・？」

いったい何のことだろう？

「戦姉妹契約から72時間以内に戦妹が私闘で負けたら、契約が解消となる規則があるんです。戦姉が戦妹を守れなかったわけですからね。再契約も許されません」

「そんなのあったんだ……。契約が教務科に承認されたのが2日前の夜8時だから……。あと15分かぁ。それに契約解消させたがるとしたらアリア先輩と戦姉妹になりたい子だよね」

あたしは頭の中で20人ぐらいそういう子達をイメージしてみるのが……。すぐに挑んできそうな該当者から外した。

「そうゆう子はもう20人も断られたし、再申請もできない規則だから……。アリア先輩狙いの人に襲われる可能性はないよ」

「……。みんながみんなアリア狙いじゃないのよ」

笑いながら襲ってくる可能性を否定すると……。志乃ちゃんは何かをあたしに聞こえないぐらいの声で呟いた。

「あかりちゃん。防刃制服……。緩んでないよね？」

「……。志乃ちゃん？」

花壇に隠されていた一本の刀を手を取った志乃ちゃんは明らかにいつもとは違った様子で刀を抜いて、その刃をあたしに向けてきた。

「あかりちゃん……。アリアと別れて」

鞘を地面に捨てた志乃ちゃんは近寄りがたい雰囲気であたしにそう言ってくる。

「志乃ちゃん。どういふこと……。？」

「戦姉妹契約を強制的に解除させるには72時間以内に私闘でハッキリと敗北させなきゃいけない。・・・そういう・・・校則なの！」
ズバッ！

あたしに駆け寄ってきて刀を振り払ってきた志乃ちゃんはそのまま花壇の花を切り裂くと、再びあたしを斬りつけようとしてくる。

「っ！」

その刃を後ろに跳んで何とか避けたが・・・ネクタイが少し切れてしまっていた。

「ごめんね。防刃制服を着ていても・・・骨は折れちゃうかも。でも・・・付きっ切りで看病してあげるから」

怪しい雰囲気志乃ちゃんを見てあたしは背筋がゾクッとしてしまった。何だか志乃ちゃんが怖いよぉぉ！

「うう・・・」

そう思いながら後ろに後退しようとする・・・後ろから何か気配を感じた。

ワウウウウ！！

「きゃあああ！！！」

すると後ろには番犬・・・というよりも猛犬の犬達が一斉にあたしに飛び掛ってきた。

「こ、こないでええええ!!」

あたしは咄嗟に犬達から離れると、ナイフを取り出して振り回す。どうやら犬達は鎖に繋がれているようでこれ以上は近づけないようだ。・・・少し安心した。

「あかりちゃんは素早いね。まるでツバメみたい」

後ろから聞こえた志乃ちゃんの声に振り返ってみると……志乃ちゃんは居合い斬りのような構えをしていた。

「でもあたしはツバメでも斬れるよ」

二目見ただけで理解した。・・・間違いなくあの技は危険だと。

あたしが志乃ちゃんの家に入ってお夕飯を食べている頃、涉くんは志乃ちゃんの家を取り囲む塀の上に上がって屋敷の中を覗き込もうとしていた。

「駄目だよキバツト。ただでさえ暗いのに、こんなに遠かったらと

てもじゃないけど中なんて見えないよ」

『畜生！このままじゃ志乃って譲ちゃんの欲望が暴走しちまうぞ！』

「ねえキバット・・・彼女の欲望を抑える必要があるのかな？別に彼女が間宮さんと一緒にいたいって欲望なら大丈夫なんじゃないの？」

『馬鹿！そんなはずあるか！お前はヤンデレの危険性を知らないからそんなことが言えるんだ！いいかヤンデレっていうのを相手にするのはなあ！ちよつとの選択肢のミスで自分が殺されたり、周りの人が殺されたりするんだぞ！あゝ怖い怖い！』

「・・・やけに詳しいんだね。もしかして・・・そのヤンデレってのが好きなの？」

『違う！俺は・・・実はその・・・ポニーテール・・・萌えなんだ』

キバットは照れくさそうに渉に告げるが・・・渉は「別に知りたくもなかった」とでも言いたげな様子でキバットから視線を外した。

『だけどよお渉。グリードとヤミーの危険性は音矢から聞かされてるだろ？だったらあの譲ちゃん達を守るためにもやらなくちゃいけないんじゃないのか？』

「・・・キバット。正直言って僕は分からないんだ。自分の戦う理由が・・・。僕は確かにキバの鎧を継承している王家だ。だけど兄さんは純潔のファンガイアなのに僕は人間の血が混ざっているハーフファンガイア。ハーフっていう中途半端なせいで僕は自分の力を使いこなせずに暴走してしまう時もある。・・・そのせいで僕は

誰かを傷つけるのが嫌なんだ。だから僕は友達を作らない。関わりを持つつもりはない。僕はそんな生き方をしてきた」

『渉・・・』

「そんな僕が誰かを守ろうなんて・・・やっぱり無理なん・・・」

『この馬鹿ヤロウッ！』

ドカッ！

渉くんが弱音を最後まで言い切る前にキバットが体当たりをした。

『おい渉！前に光太郎が言ってただろ！『強い力を持っているのにそれを悪用して人々を傷つけることはやってはいけないことで、目の前で人が傷つくかもしれない時に力を使わずにいるのは悲しいこと』ってよお！お前だって目の前で人が傷つく姿を見るのは嫌だろ？』

「それは・・・そうだけど・・・」

『それに剣崎だって口癖のように言ってるだろ。『戦えない人達のためにも自分が戦う』ってな。だから渉、お前も自分の戦う理由を見つけようぜ！』

「・・・もう少し見張ってみるよ」

キバットの話聞いた渉くんは何処か不安そうに頷いて屋敷を再びのぞき始めた。するとそこには、あたしが志乃ちゃんと対自しているのが見えていた。

「っ!？」

『おいおい・・・やっぱりあの譲ちゃんはやンデレだったじゃんか!？』

冗談のつもりで言っていたキバットは実際のことに驚いてしまった様子で辺りをバタバタと飛び回る。

「・・・やっぱり佐々木さんがあんな風に暴走しているのも欲望が加速しているからなのかな？」

『冷静に分析してる場合じゃねえ!とつとあかりって譲ちゃんを助けに行くぞ!』

キバットはあたし達のところに飛んで向かおうとすると・・・涉くんはキバットを捕まえて向かわせないようにした。

「・・・まだ駄目だよキバット」

『何言ってるんだ涉!はやく助けにいかないとヤンデレ被害者が出るんだぞ!』

「佐々木さんにメダルを入れたのはカザリなんでしょ・・・だったら2人とも助けるためにもチャンスを待たないと」

涉くんは冷静そうにキバットにそう告げるが・・・その拳は何処か感情を殺しきれない様子で震えていた。

『・・・ちゃんとみんなを守ろうとしてんじゃないか』

「何か言ったキバット？」

『何も言ってねえよ。・・・仕方ねえヤミーがヤンデレから出てくるのを待ってみるか』

そう言ったキバットは渉くんの肩に止まると、渉くんと共にヤミーとかいう怪人が出るのを待ち始めた。

紅渉&佐々木志乃 中篇（後書き）

せっかくこちらを更新したんですが、本編である欲望の交差を一区切りすることを優先したいので、今年はあと1回程度しか更新しません。申し訳ありません。

紅渉&佐々木志乃

後編（前書き）

今日はクリスマスですが・・・この物語はクリスマスとは残念ながら関係ありません。

これは半年前・・・リーフパイを譲ってもらった後の出来事だ。

「はい・・・半分あげるよ。あたし割り込みっぱかったし」

パイを売っていた店からそれほど遠くない公園のベンチに座ったあたしは、隣に座った志乃ちゃんに買ったリーフパイの半分を手渡した。

「で、でも・・・外で食べるなんてはしたな・・・」

「焼き立てを食べれるなんて！超すごいよ！」

そう言ったあたしはハーフパイを一口口に咥えると・・・志乃ちゃんは少し羨ましそうにあたしを見つめてから手でつまみをちぎって口に咥えた。

「・・・おいしい」

「でしょっ？」

どうやらお口にあったようだ。よかった気に入ってくれて！

「あ、あの間宮さん・・・」

「『あかり』でいいよ！あたしも『志乃ちゃん』って呼ぶね！」

あたしがそう言う・・・志乃ちゃんは照れくさそうに頬を少し赤く染めた。

「あ、わ、私・・・あの、お代、半額支払わせてくださいっ!」

志乃ちゃんはそう言って財布を取り出して、それを開くが・・・すぐにその手を止めた。

「あ・・・わ、私カードしか持っていない」

まあ・・・そういうこともあるよね。

「じゃあ明日でいいよ」

「でも・・・明日またお会いできるかどうか・・・クラスも違うし・・・」

「ずっと後でもいいよ。だって・・・いっぺん友達になったらずっと友達だよ」

あたしがそう言った途端・・・志乃ちゃんは目に涙目になりながら「ずっと・・・友達・・・」と呟くと・・・

「私の・・・初めての友達・・・ふえええ」

「えっ!?なんで泣くの!?!」

いきなりその場で泣き始めてしまった。その時のあたしには志乃ちゃんが泣いた理由はよく分からなかったけど・・・こうしてあたしと志乃ちゃんは友達になったんだ。

そして現在……あたしは志乃ちゃんの居合いに狙われていた。

シュ
バ
バ
ツ
！

志乃ちゃんの居合いをあたしは咄嗟にナイフで受け止めたが・・・受け止めきれずにナイフが碎けてしまった。

バシヤアアン

そして勢いすら殺しきれずに後ろに下がってしまったあたしはそのまま噴水に落ちてしまった。

さすが志乃ちゃん……やっぱ強い。

「あかりちゃん・・・あかりちゃんが悪いんだからね？」

「・・・たくない。・・・失いたくない」

志乃ちゃんは夜風に髪をなびかせて涙を流しながらあたしに歩み寄ってくる。志乃ちゃんはどうしちゃったんだろ？

「だから・・・斬る!!」

刀を強く握り締めた志乃ちゃんは大粒の涙を地面に落とす。

「あかりちゃんはアリアになんかあげないっ!!」

「あたしだってアリア先輩との戦姉妹解消したくない!!」

志乃ちゃんにあたし自身の意思は伝えてはみたが・・・たぶん今の志乃ちゃんじゃ引き下がってくれない。本気であたしを倒しに掛かってくるだろうな。

「・・・っ！」

刀だ・・・刀を奪ってしまえばきつと志乃ちゃんは闘志を失うはずだ。

「・・・」

そう判断したあたしは両手を腰から下で広げるような独特の構え・・・鳶穿の構えを取る。

「・・・知ってるよそれ。それでこの間ライカから紙を取ったんだよね。あかりちゃんはアリアからも『エンブレム』を奪った訳だし・・・今それで取るとしたら・・・刀だよね？」

ヤバイ。あたしの考えがバレてるっ！

「私・・・推理したの」
ザクッ！

先ほどまで持っていた刀を地面に突き刺した志乃ちゃんはあたしから少し離れて花壇を漁り始める。

「それ・・・手の届く範囲じゃないと使えないんじゃないかって・・・つまり相手の懐に入らないと使えない・・・武士は必ず大刀と小刀を携えます。ここまで使ってきた刀は巖流では小刀。そしてこれが大刀・・・」
チャキッ

あたしの拳4つつ分はありそうなぐらい長い柄の先を掴んだ志乃ちゃんは・・・それを一気に花壇の中から引き抜く。

「通称・・・物干し竿」

その刀は志乃ちゃんの身長ぐらいあり、鞘に納まっている部分だけでもあたしの全長くらいはありそうなぐらい長かった。

「・・・・・・・・」
ズルッ

「っ!？」

鞘から刃を抜いた志乃ちゃんは自分の足元に鞘を捨てると・・・何やら志乃ちゃんの背中からは包帯まみれの腕が生え出たように見えた。

「・・・あかりちゃん。刀身は掴まない方がいいよ。指がボトボトって全部落ちちゃうから」

しかしその腕はわずか数秒で引っ込んだ。・・・一体なんだっただろう今のは？・・・いや、今はそれよりも志乃ちゃんの方だ。

「志乃ちゃんどうしてっ！？・・・友達同士なのに！！」

「友達だから・・・退けないの！！」
バシヤアアアン！

「っ！？」

あたしが身体を捻るようにして刀身を避けると・・・志乃ちゃんの振ってきた大刀は噴水の水を切り裂く。

「避わしたつもり！？」

銀色のメダルに包まれて猫科の生物のような両脚になった志乃ちゃんは高く跳び上がると電柱の柱を蹴って自身を加速させると・・・

「甘いつ！」

そのままあたしとの距離をつめて大刀をあたしに振り下ろしてくる。

「決まった!」

「っ!!」

パシッ!

あたしは咄嗟に自身の征服の防刃ネクタイを手にとって志乃ちゃんの大刀の刃を受け止めると・・・そのままネクタイを滑らせながら志乃ちゃんとの距離をつめて大刀を奪い取った。

「くうっ!」

バシァァァンっ

大刀が取られても加速の勢いが落ちていない志乃ちゃんはそのまま噴水に落ちてしまうと・・・そのまま志乃ちゃんは俯きながら涙を流した。

「・・・うう・・・」

「ズット・・・トモダチィ」

「っ!」

あたしが志乃ちゃんにどう声を掛けてあげようか迷っていると・・・志乃ちゃんの身体からはさきほど腕だけ見えていた包帯に巻かれた怪人が全体を出してきた。

「な・・・何がどうなってるの?」

「トモダチィ・・・アツカリンッ!」

まるで寄生してたかのように志乃ちゃんから出てきた包帯の怪人は・・・たぶんあたしのことを呼びながら鋭い爪をしたウンピョウのような怪人になった。

「アツカリ〜ンッ！」

何だか空気扱いされてしまいそうだからその呼び方は止めてほしい。

「アツカリ〜ンッ！ズッドトモダチいい！！」

チャキッ

「きゃあ!？」

ウンピョウのような怪人が鋭い爪を突きたてながら物凄い速さであたしに襲い掛かろうとしてきたので、あたしは咄嗟に身を屈めて「もう駄目かも」なんて思ってしまった・・・

『ようやく出やがったか!』

ドカッ！

キバットがウンピョウの怪人に体当たりをして怯ませてくれた。
・
助かった。

「あ、ありがとう渉くん。でもどうして渉くんがここにいるの？」

まさかずっと志乃ちゃんのことを付けていたの？それはさすがにあたしもちよつと引いちゃうなあ。

「・・・佐々木さんがグリードにセルメダルを入れられるところをキバットが目撃していてね。ヤミーが佐々木さんから出るまで見張っていたんだ」

「どうやら涉くんは志乃ちゃんが好きだから追跡していた訳ではなかったらしい。あたしの推理は見事に外れちゃったよ。」

「ところでグリードとかヤミーとかっていったい・・・？」

「そのことはまた後で話すよ。・・・間宮さん、佐々木さんを頼むよ」

「う、うん」

とりあえずあの怪人は涉くんが引き受けてくれるらしい。・・・あたしや志乃ちゃんに怪人と戦う力はないから本当に助かったよ。

「キバットッ！」

『おうっ！キバットていくぜ！ガブッ！』

キバットに左手を噛ませてスタンドガラスのような紋章を顔に浮かべた涉くんは、普段のやさしそうな涉くんとは思えない殺気を出す・・・

「変身！」

涉くんの身体は銀色へと変化して、そのシルエットも仮面戦士らしいものへと変わる。あたしは何が起きているのかも分からないままその光景を眺めていると・・・涉くんを包んでいた銀色ははじけ飛んで、そこには吸血鬼を思わせる赤い仮面戦士が立っていた。

「それが……涉くんの変身する仮面戦士？」

「うん。・・・この姿が仮面ライダーキバ。・・・ファンガイアの王族として王の鎧を纏った姿だよ」

何やら後ろめたそうにしゃべったキバは中腰になって構える。

「・・・お友達は大切にね」

「えっ？」

あたしにそう呟いたキバはウンピョウのような怪人に向かって駆け出した。・・・さっきの後ろめたそうなしやべり方。それにあたしがロッカーに隠れて聞いたあの時の言葉。やっぱり涉くんは・・・

「ふえええ〜！あかりちゃんに嫌われちゃったよ〜！」

おっとそうだった！志乃ちゃんを任されたんだった！

「また一人ぼっちに戻っちゃったよ！」

「志乃ちゃん……」

ようやく分かったよ。志乃ちゃんがあたしとアリア先輩を引き剥がそうとしてた理由が・・・志乃ちゃんはまだ寂しかっただけなんだ。

「あたしこそ……何だか無神経だったみたいでごめんね……」

志乃ちゃんのこと・・・嫌いになったりしないから」

「ほ、本当に？嫌いにならない？」

「うん！」

本当の友達なら相手のどんな部分も受け止めなる・・・一般中にいたときにとある先輩が言っていた言葉だ。あたしも志乃ちゃんの寂しがりやな部分をしっかりと受け止めてみようと思う。

「じゃあ好きですか？私のこと好きですか？」

「う、うん」

「あかりちゃん！私も大好き！」

なぜだろう・・・志乃ちゃんの『好き』からは友達以上の何かを感じられずにはられない。

「好き好き好きなのよ～～～！！」

その後・・・十数分かけて何とか志乃ちゃんを落ち着かせたあたしは志乃ちゃんの身体から出てきた怪人と戦うキバ・・・涉くんがどうなったのかが気になり、近くでそれらしい戦いの音が聞こえた駐車場へと向かった。

あたしが志乃ちゃんを落ち着かせようとしていた頃、涉くんが変身しているキバは徒手格闘だけで鋭い爪を持つウンピョウのような怪人と戦っていた。

「ハ
ア
ア
ア
ツ
！」

ドカツ！ドカツ！

ウンピョウの怪人の攻撃を右腕で受け止めたキバはトラックの車体に足を引っ掛けて宙吊りになりながら連続でパンチをして怯ませる。

『このヤミー・・・さしずめウンピョウヤミーってところだな。渉！ 奴の攻撃は素早くて鋭いから気をつけろよ』

パシツ！

ウンピョウの怪人の爪を掴んだキバは右足を大きく振り上げると・

バキッ！

そのままかかと落としで爪をへし折った。

「凄い戦い方・・・」

丁度あたしがその場所にやってくると・・・キバは右腰から赤いフェッスルを手を取った。

「このまま決めるよ」

『WAKE UP!!』

そしてベルトに留まっているキバットにそのフェッスルを加えさせて吹かせると・・・キバは銀色の金具で拘束されている片足を頭の辺りまで上げると・・・キバットがその金具の周りを飛び回って鎖が外れて中からは赤い蝙蝠を思わせる禍々しい部分が開放されたかと思うと・・・夜の空はさらに暗さを増して・・・月は赤く染まった。

「えっ!?!?どうなってんのこれ!?!?」

涉くんの変身するキバはこんなことまでできるの!?!?

「ハッ!」

そして片足だけで背景に月が重なるように見えるまでキバは跳び上がると・・・

「ハアアアアッ!」

そのまま急降下してウンピョウのような怪人にキックを決めた。

「アッカリ~~~~ン!?!?」

ドオオオオオオン！

「やったね渉くん！」

あたしはウンピョウの怪人を倒して変身を解除した渉くんに駆け寄ろうとすると・・・

「・・・それ以上僕に近づかないで！！」

何処か苦しそうな表情をしている渉くん「近づかないで」と言われてしまった。

「渉くん？どうかしたの？」

「離れ・・・うわああああっ！？」

苦しむように叫んだ渉くんはさっきキバットに噛まれた時に顔に浮かび上がっていたような牙を自身の前に出現させると・・・それはあたしに向かって飛んできた。

「っ！？」

あたしはそれをギリギリで避けると・・・その牙は地面に刺さり周囲の草花を一瞬で枯れさせてしまった。

「間宮さんはあの時・・・ロッカーの陰に隠れて僕の独り言を聞いていたよね。だったらこれで分かったでしょ？ハーフファンガイアで自分の力すら制御できない僕なんかじゃ・・・誰も友達になってくれるはずがない・・・僕は危険なんだ」

あの時ロッカーに隠れていたの・・・気づいてたんだ。

「涉くん。友達っていうのは相手の良いところだけじゃなく悪いところもしっかりと受け止めて・・・一緒にいてくれる人達のことをいうんだよ。あたしは・・・あの学校みんなはきつと受け入れてくれるよ」

涉くんはただ・・・人が苦手なんじゃなくて自分の力で友達を傷つけるかもしれないから人と関わることを避けているだけなんだ。だから・・・分かってもらわないと。涉くん自身の本当の強さと優しさを。

「・・・そんなの・・・できるはずがないよ。現に僕は君からライフエナジーを吸い取ろうとしていたんだよ？」

「きっとできるよ！だって結局あたしからライフエナジーを吸い取ってないじゃん。自分で押さえ込めたんでしょ？だったらこれからも抑えることができるよ！」

さっきの牙みたいなのは・・・避けなくてもあたしには当たってなかったと思う。きつと涉くんならちゃんと自分の力を抑えることができると思う。

「自分を信じてみなよ」

『譲ちゃんなかなかいい事言ったじゃんか！』

こちらに飛んできたキバットはあたしの周りをクルクルと飛び回ると・・・涉くんは夜空に輝く星を見つめる。

「僕は・・・友達を作ってもいいのかな？」

「駄目っていう人なんか・・・絶対にいないと思うよ」

『そんなのがいたんなら俺が噛み付いてやる！』

あたしとキバットも・・・涉くんがこれから友達が増えてくれればいいと思っているんだから。

「・・・それじゃあ間宮さん。僕と・・・友達になれませんか？」

涉くんはまるで告白をするかのように恥ずかしがりながらあたしにそう言ってくる。

「いいけれど・・・」

「・・・けれど？」

「友達なんだから、間宮さん、じゃなくて、あかり、でいいよ！」

あたしは涉くんのことを名前で呼んでいるんだから・・・せっかく友達になるんだから涉くんも苗字じゃなくて名前で呼んで欲しい。

「え・・・えと・・・あ、あかり・・・さん」

少し緊張してオドオドとしていたけど・・・涉くんは初めてあたしのことを名前で呼んでくれた。

「これで友達だね！」

戦姉妹契約から三日が経った今日。・・・あたしは紅渉くんという新しい友達ができた。

「・・・どうやら渉の葛藤は何とかなったっぽいな」

あたし達は気づいていなかったが・・・駐車場には青いバイクに跨りながらあたし達のやりとりを見ている武偵高の制服を着ている長身の生徒がいた。

「・・・キバットに『もしも渉が戦えなくなったら』って言われてたけど・・・やっぱり俺が来る必要はなかったな」

スピードのAのカードを持っていた長身の生徒はそう呟くと男子寮へと歩いていった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

翌日、日直だったあたしとライカはいつもよりは学校に早く来て黒

板を消していた。

「はぁ」

とりあえず3日内解消規則はクリアしたけど・・・志乃ちゃん大丈夫かなあ。涉くんが言うにはヤミーって怪人に寄生されてたらしいし。

「おはようございます」

そうあたしが心配していると・・・志乃ちゃんはあたし達の教室にやってきた。

「志乃ちゃん昨日は・・・」

「あかりさん！あのあと私調べてみたんですけど・・・『アミカ・グループ』をご存知ですか？」

あたしは「大丈夫だった？」と聞こうと思っていたが・・・志乃ちゃんは思っていた以上に元気に話題を振ってきた。・・・なんだろう？その『アミカ・グループ』ってのは？

「戦妹同士がグループを作る制度なんです！それぞれの戦姉からの指示を受けて協力して訓練するんです！だから私もある先輩に戦姉妹申請をしたんです！あかりさん！2人で一緒に『アミカ・グループ』になりましょうね！」

「う、うんっ」

何だか志乃ちゃんに強いられてる感じがするけど・・・別に友達

同士でグループになるのは嬉しいことなので頷くと・・・

「だって私達、相思相愛ですもんね！」

「し、志乃ちゃん!？」

志乃ちゃんはとんでもない発言をした。

「・・・お前ら・・・間違いだけは起こすなよ」

その光景を見ていたライカは少し引いた感じであたし達を見ながらそう呟いていたが、あたしは志乃ちゃんに抱きつかれて身動きが取れなかったので否定することができなかった。

「・・・僕もあかりさんとアミカ・グループになりたいなあ」

『頑張れよ! まだチャンスはあるぜ』

あたしが抱きつかれてる時・・・廊下の方では涉くんとキバツトらしき声が聞こえたような気もしたが・・・本人だったかは自身が多かった。

そしてその日の午後、強襲科での訓練の時・・・あたしは初めて出会うことになる。去年は強襲科でSランクだった伝説の武偵で後

に学園中で『メダルで変身する仮面戦士』と有名になる人物・・・
遠山キンジに。

紅渉&佐々木志乃 後編（後書き）

次のA Aの更新は1月の4日になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2903y/>

緋弾のアリアAA 欲望の欠片

2011年12月25日21時50分発行